

第1話 徳川家康の勢力

豊臣秀吉の薨後、その子の秀頼の後見として政治を見ていた徳川家康が、一人威権の盛んなのに任せて、頗る手前勝手な事をする。石田三成がこの有様を見て、ついには豊臣氏のために不利となることを憂いて、家康を除こうと密かに謀る。

六歳の秀頼

第100代後陽成天皇の慶長3年8月18日、太閤豊臣秀吉が伏見城に薨じた時に、独り子の秀頼は僅かに六歳の幼児でした。甥の関白秀次は、その悪行のために、すでに3年前に切腹させられたし、弟の権大納言秀長は7年前に薨じていた。豊臣氏は、いうまでもなく、秀吉1代で出世した家であるので、他には一族として秀頼の力になるような者は誰もいなかった。

秀吉の懸念

英明な秀吉は勿論はやくからこれに気づいていた。一朝自分が世を去ったならば、家運は忽ちにして傾きはしないかという懸念は常に彼の胸から去らなかった。さればこそ政務をつかさどる五奉行の外には、徳川家康、前田利家、宇喜多秀家、毛利輝元、上杉景勝の五大老を定めて、彼等の間で互いに牽制させて、その勢力の均衡によって豊臣氏を安泰にしようとしたり、又、徳川、前田、宇喜多、毛利、小早川の諸家との間に、しきりに姻戚関係を結んで、——とはいっても、彼にはもともと子女がいなかったので、例えば淀君の妹を家康の子の秀忠の妻としたり、利家の娘を養女として秀家に嫁がせたり、又、弟秀長の娘を養って輝元の養子の秀元の妻としたり、北の政所の甥の秀秋を小早川隆景の養嗣子（あと継ぎ）としたりするような、持って回った方法によってでしたが、ともかくも姻戚関係を結んで、——それに依る情誼の上から、豊臣氏に背かないようにした。

秀吉の遺言

しかし秀吉は、なお容易に安心が出来なかったもので、慶長3年の夏、病が次第に悪くなって、とても回復がおぼつかないとなった時には、其の煩悶、苦悩は実に甚だしかった。幾夜も眠らないで、過去の事などを考えたり将来の事を慮ったりした末に、彼は家康、利家以下の諸大名に血判した誓書を納れさせて、どこまでも秀頼を奉戴し、協力一致して豊臣氏に尽くすという事を誓わせたが、更に最後には、五大老に秀頼の成り立つようにとその世話を頼み、五奉行には、一身を捨てて主家のために尽くすようにと言いつけました。

その時、彼が五大老に対して秀頼の事を頼んだ書面が今も伝えられているが、それにはこう書いてあります。曰く、「秀より事なりたち、候ように此のかきつけのしゆと、しんたのみ申候、なに事も此のほかはおもいのこす事なく候、返々秀より事たのみ申候、五人のしゆたのみ申候、いさい五人の物に申わたし候、なごりおしく候、以上」と。なんとという悲しい聲でしょう。これが身を微賤から起こして天下を掌握して、豪氣堂々、一世を掩った英雄の末期の言葉かと思うと、誰か涙なくして読めるで

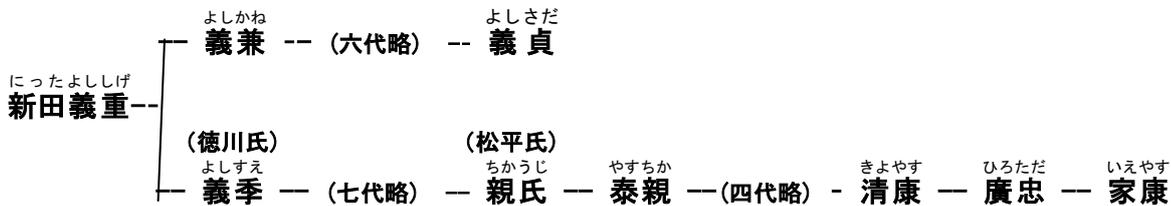
しょうか。

なお、この時、家康は伏見に居て政治を見、利家は大坂にいて秀頼のお守役をするようにと秀吉は言い渡したが、これは彼等 1 代だけではなくて、家康の後にはその子の秀忠、利家の後には其の子の利長がこれに代わるようにと後々の事までも定めておいたのです。

秀吉が薨後の実際

ところが、秀吉が薨じた後の実際はどうでしたか？ 折角彼が肝胆を砕いて考えておいた事などは全く何の役にも立たず、数十枚の誓書の如きは、彼の一死と共に忽ち反古と化してしまっただけです。というのは、彼が最も気にして、誓書にも強く書かせて、決して徒党を組んで争ったりしないようにと戒めておいたにもかかわらず、彼が薨ずると、諸将の間に露骨な党争が起こったために、久しく隠忍韜晦していた家康に、忽ちこれに乗じて、従来の律儀な態度を捨てさせる機会と口実とを得させ、ついに豊臣氏に代わって天下に号令するようにならせたのです。

さて、家康が非凡な人物であったことは、すでに信長や秀吉のことを話した時にもちよくちよく述べておきましたが、今や秀吉の後をうけて、さらにその統一を硬くし、江戸幕府を開いて泰平の基を定めた事蹟をお話する順になったに就いては、ここに改めてその生い立ちからの事を簡単に述べます。



徳川氏は新田氏から出たと伝えられている。義重の子の義季が上野国（群馬県）新田郡徳川村に住んで、始めて徳川氏を称したのですが、その 9 代の孫の親氏が三河国（愛知県）の六所山麓の松平地方を領してから松平氏を称した。家康は親氏から九代目に当る。後奈良天皇の天文 11 年 12 月に三河国の岡崎城に生まれた。

家康の祖父と父

しかし、そのころの松平氏は極めて微々たるものでした。家康の祖父の清康の時に、漸く三河の大部分を従え、進んで兵を尾張に出して、織田信秀 - 信長の父 - と戦ったりするほどにはなったのですが、不孝にして、清康は 25 才の時に、事の行き違いから、部下の者に殺された。すると、引き続いて家中に騒動が起こったために、家康の父の廣忠は、幼少の身で国外に流浪して、ひそかに安全を計らなければならなかった。廣忠は漸く 12 才の時に、駿河の今川氏の保護を受けて岡崎に帰り、後、三河の刈谷城主水野忠政の娘を娶って、その間に生まれたのが即ち家康です。家康は幼名を竹千代といった。

家康の幼時の不孝

第1話 徳川家康の勢力

そして、家康の幼時もまた頗る不幸でした。第1には先づ3才にして母と生別するような事が起こった。というのはこうです。— 彼が生まれた翌天文12年の7月、外祖父の忠政が病死すると、其の子の信元(即ち家康にとっては伯父)が織田氏の身方となったので、父の廣忠は、妻の兄が今川氏の敵の身方となったのでは今川氏にたいして義理が立たないからとて、ついに家康の母を離縁することにして、その翌13年にこれを水野家に送り返したのです。実際、そのころの松平氏は勢力が弱かったのに、西の織田氏と東の今川氏との間にはさまっていて、どちらかの保護を受けなければ忽ち滅ぼされる虞があったのです。廣忠は前々からの関係で、今川氏に属してその存在を保っていました。

織田家に人質

それでその後、家康が6才の時に、織田氏の攻撃が漸く急になると、廣忠は今川氏の援兵を請い、家康を人質として駿河に送った。ところが、その道で、織田氏に心を寄せる者がこれを奪って尾張に送ったので、織田信秀は大いに喜び、これを囚に廣忠を身方にしようとして、使いを岡崎に遣って廣忠に言わせた。

「竹千代君は信秀がたしかにお預かりしておく。就いては、この際、今川氏との関係を絶って、信秀の身方におなりなさい。さもないと、自然、御子息の命にもかかわるようなことになりましょうぞ」と。

廣忠はこれに対してきっぱりと答えた。「今川氏との旧好を変ずることは出来ない。子の愛に溺れて不義理な振る舞いなどをどうしてしよう。竹千代の事は、そちらのお心任せになさるがよろしい」と。信秀はこれを聞いて、一旦は憤ったが、また、廣忠の実義を感じて、家康をそのままにしておいた。

今川家に人質

しかし、家康の不孝はこれに止まらなかった。8才の時には父の廣忠の病死に遭い、ついで、今川氏が捕虜同様にしていた織田信広という、信長の腹違いの兄と交換されて、織田氏から取り返されると、今度は今川氏の許に人質となって、19才になるまで駿府にいた。しかしその間、彼は臨濟寺の和尚の大原という、知者で学者で、又、武道の達人でもあった人に就いて、大いに学問を修めたといわれる。

家康の人となり

こういう風に、家康は幼い時からさまざまの難儀に出会ったので、何事にも辛抱がよく、その上、賢くもあったので、少年の頃から人にすぐれた考えがあった。

かつて尾張にいた時に、熱田神社の神主が、慰みにとて九官鳥を贈ってくれた。しかし家康は少しも喜ばずに、「この鳥はよく他の鳥の鳴きまねはするけれども、自分の鳴声というものを持っていない。こういうものは大将のもてあそぶべきものではない」といって、これをしりぞけたということです。

又、駿河(静岡県)にいたころ、駿府(現 静岡市葵区)の西の安倍河原で、大勢の子供が石合戦をしたことがあったが、その時、家康は、一方が小勢で、他の半分ほどしかなかったのを見て、この小勢のほ

第1話 徳川家康の勢力

うが、おのづから決心も堅く、隊も整うであろうから、きっと勝つ、といったが、果たしてその通りであったということです。

岡崎に帰る

十五才の時に、一時岡崎に帰ったが、これは先祖の墓参のためであって、やがてまた駿府にかえったので、全く今川氏の手をはなれて岡崎の城主となったのは、永禄3年の5月、桶狭間の戦いで、今川義元が信長のために斬られた後のことです。この時、彼は19才でした。未だ松平元康とっていた頃で、この戦いには、彼は丸根の砦を陥れて、大高城を守っていたのですが、義元の戦死を聞いて兵を三河に引き上げたのです。（これらの事はすでに第四巻「室町・安土桃山時代」の「織田信長の入京」の話に述べました。） 実に6才の時から凡そ13～4年の間を国外に人質となっていた後に、漸く父祖以来の領地に帰ったのです。

信長との同盟

一方、今川氏は、義元の子の氏真が家を嗣いだが、暗愚で、意気地がなかったので、家康もまた、他の多くの将士らと同じように、彼に愛想をつかした。そして断然、今川氏との関係を絶つと、折柄、伯父の水野信元らの勧めもあったところから、永禄四年の春、尾張の清洲に信長を訪ねて和議を結び、これより永く織田氏の身方となった。これが徳川氏の出世の基でした。

こうして家康は、先づ三河の国内を平らげて、これを一統すると、兵を東に向けて次第に今川氏の領地を侵して行ったが、ついに永禄11年には、甲斐の武田信玄と申し合わせて氏真を攻め、これを伊豆に逐って、その領地を分けて、信玄は駿河を取り、家康は遠江を得た。

そこで、城を浜松に築いて、翌々元亀元年の正月、そこに移った。そしてその年の6月には、信長を援けて近江の姉川に浅井、朝倉の連合軍を破り、大いに武名を揚げた。しかし、その翌々3年12月には、上京を志して信濃から遠江に出て来た甲斐の信玄のために、遠江の諸城を陥れられたのみならず、三方が原の会戦に大いに破られたが、間もなく、彼に取っては幸いにも、信玄が陣中に病没したので、すぐまた旧領地をことごとく回復した。

海道一の大領主

そして信玄の死後は、信長と連合して、武田勝頼を長篠に破り、更に、その疲弊に乗じて、信長と共に甲斐に攻め入って武田氏を滅ぼした。天正10年3月のことで、この時の功によって、彼は駿河をも領地とすることが出来た。しかし間もなく本能寺の変が起こると、甲斐、信濃の人々が乱をなしたのに乗じて、兵を進めてこれを攻め取り、遂に三河、遠江、駿河、甲斐、信濃の五カ国を領するに至った。実に東海道第一の大領主となったのです。

秀吉への服属

ついで天正12年の春、織田信雄が秀吉に対して兵を起こした時には、家康は信雄の請いに応じて兵を

第1話 徳川家康の勢力

尾張に出し、長久手の一戦に秀吉の1支隊を殆ど全滅させて、ついに秀吉をして和を講ずるの止む無きにさせた。この時から家康の武名は大いにあらわれて、秀吉にもまた頗る重んじられた。その後、間もなく、秀吉は家康の子の秀康を養子として大阪に迎えて、自分の妹の朝日姫を家康の後妻として浜松に送ったが、これは長く家康を敵としておくことの不利を悟って、和親をはかったのだということです。尤も、そのころ秀吉はすでに紀伊、四国、北陸地方を平定して、関白にまでなっていたのですから、家康のほうでもまた、この上、強いて敵対することの愚なのを悟ったという事もあったでしょう。

江戸城に移る

こうしてその後は家康もまた忠実に秀吉に仕えて、その海内統一の業を助けた。現に小田原征伐の時の如きは、その先鋒となって、自分の娘を妻としている北條氏直を攻めてこれを滅ぼしたほどです。この時の功によって、彼は北條氏の旧領である伊豆、相模、武蔵、上野に、上総、下総の二カ国を加えた六カ国の領主に封ぜられて、はじめて遠江から武蔵の江戸城に移った。時に天正18年(西暦1590年)の8月朔日でした。

この江戸城は、これを築いた大田道灌の死後、扇谷上杉家が保っていたのを北條氏に取られたのでした。

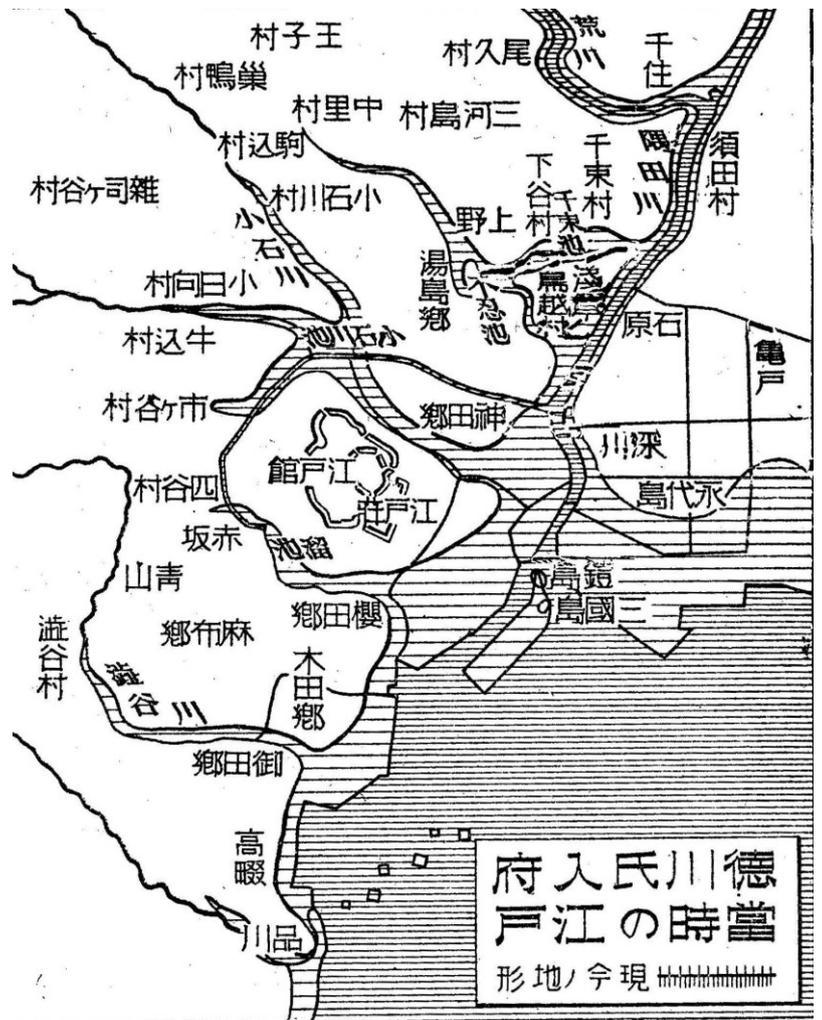
家康が入城したころは、その規模が至って小さかった上に、玄関の式台には船板が使っていたというくらいですから、よほど粗末なものであったに違いない。

その城下もまた、昔ながらの武蔵野の一隅で、蘆などの茂っている淋しい一漁村に過ぎなかったが、家康が先づ城郭を改築し、城下の入り江を埋め立てて市街地としたりしたので、三河をはじめ諸国の商人が続々と移り住んで、ようやく人家も多くなり次第に繁華に赴いた。

これが今の大東京のはじめです。

家康の本心

さて家康は、秀吉に仕えて極めて忠実でしたので、大いにその信用を受けて官位も次第にのぼり、慶長元年には正二位内大臣に任ぜられた。そして慶長3年に秀吉が薨じた際には、五大老の筆頭として



第1話 徳川家康の勢力

天下の政治を見るようにとの遺言をも受けたのです。しかし、彼の本心をいえば、もともと信長にさえ尊敬されて、殆ど対等の同盟者として待遇されていたのですから、その武將にしか過ぎない（のみならず、身を微賤から起こした）秀吉になど、頭を下げる気は全くなかったのです。ただ、時の勢いで、よんどころなく一時隠忍していたのですから、今、その死によって、久しくおしつけられていた重しがなくなるや否や、忽ち頭をもたげて、やがて無理にも天下を徳川氏のものにしようとなりました。又、実際の地位、声望からいっても、彼は十分に諸大名を圧するに足る大勢力を持っていたのです。

この家康の野心を早くからそれと気付いていたのが石田三成です。蛇の道はへびという諺（訳注：同類の者のする事は、同類の者には容易に推知できること）があるが、彼もまた一方ならぬ野心を抱いていたからです。

幼時の石田三成

石田三成はもと近江の人で、幼名を佐吉といった。10才のころから寺に預けられて、読み書きの修業をしていた。すると、ある日、そのころ長浜の城主であった秀吉が、鷹狩りに出て、咽喉がかわいたので、その寺に入って、お茶をくれいと言った。佐吉は、ぬるいお茶を大きな茶碗に七八分目ほど入れて出した。秀吉は咽喉を鳴らして、飲みほして、「もう1ぱい」というと、佐吉は、前よりも少し熱くしたのを、半分ほど入れて出した。それをも飲みほして、「もう1ぱい」というと、今度はごく熱いお茶を小さな茶碗に入れて出した。そこで秀吉は、この子供の凡庸でないのを知って、住職に請うて連れて帰って側近く召使うことにした。この時、佐吉は13才でした。

三成の出世

それからというもの、彼は秀吉の左右に侍して、こまこました用をたしたが、所謂目から鼻に抜けるという才人でしたので、実によく機転が利いて、ますます秀吉の信用を受けた。こうして天正13年7月、23才の時に、従五位下に叙し、治部少輔に任ぜられて、名を三成と改めた。ちょうど秀吉が関白になった時であり、彼は五奉行の1人に補せられた。戦功こそ無かったが、その有りあまる才智を政務の上に働かせて、頗る成績を挙げたので、秀吉の信用はますます加わった。

ついに近江（滋賀県）の水口の城主に取り立てられて、四万石を領することになったが、この時、彼は四万石のうちの一萬五千石を与えて、島左近勝猛という勇士を召し抱えた。秀吉はこれを聞いて、大いに感心して、「主従の知行でこれほど差のないのは珍しい。しかし、その志でなければ左近ほどのものに頭を下げることは出来ない。よく与えた」と言って褒めたということです。思うに、三成は、自分が実戦の経験に乏しく、武略に秀でていなかったため、武功の誉れの高い島左近を、高禄も以って召抱えて、股肱（君主が最も頼りとする家臣）としたのでしようが、それにしてもよく思い切って与えたものです。三成もまた確かに尋常一様の人物ではなかったのです。その後、彼はますます秀吉に重く用いられて、28才の時には、近江の佐和山の城主として十九万四千石を領するまでになった。

三成と武將らとの反目

第1話 徳川家康の勢力

こうして、後には五奉行の中でも随一の勢力を占めるに至ったが、それと共に、漸く権勢を弄んで、自分の気に入らないものはこれを排斥したりしたために、今は却って、戦功を立てた人々の中にも、彼の機嫌を取って、身の安全を計ろうとする者なども出て来た。しかし、一方にはまた彼が秀吉の信任を笠に被て威張っているのを不快に思っ、これを憎む者もあった。加藤清正、福島正則、池田輝政、黒田長政、浅野幸長、小早川秀秋、細川忠興らはこの後者でした。機敏な三成は早くもこれを悟ると、却って彼等をしくじらせて、失脚させようとすると同時に、殊に親しくしていた大谷吉隆、増田長盛、長束正家、小西行長を始め、毛利輝元、宇喜多秀家、上杉景勝らのような有力な大名との関係をますます密接にして、自分の勢力を強めるようにした。

文禄の役の時に、加藤清正が秀吉の怒りに触れて、遽かに朝鮮から召還されて、伏見に謹慎させられた事があった。又、慶長の役の時には、小早川秀秋が元帥の身でありながら、本陣を留守にして、蔚山の清正らが囲まれているのを救いに行ったのは軽率であるとして咎められて、すでにその領地を代えられようとしていた事があった。それもこれも皆、三成の讒言によったのであるといわれる。

清正の問題は、その折柄、たまたま大地震があって、逸早く伏見城に駆けつけた清正が常に変わらぬ誠忠をあらわした後で、立派に申し開きをしたために、秀吉の怒りが収めたし、秀秋の問題は、家康が中に入って、秀吉を宥め、その命令を取り消して貰ったために、これも無事に収まったが、秀秋や清正らが三成を憎む心はこれより一層甚だしくなってきた。

三成の野心

とは言え、三成の野心は高が知れていた。三成は、家康のように天下を自分のものにしようとしたのではなくて、多分、室町幕府の管領細川氏のように、もしくはその家臣の三好氏、あるいはそのまた家臣の松永氏のように、主家はそのまましてこれをおもてに奉じながら、ただその実権を握ろうとしただけでしょう。実際また、彼には豊臣氏に取って代わろうとするような地位も、武力も、声望もなかったのです。彼はただ吏務に長じた一行政官に過ぎなかったのです。

家康の野心

一方、家康は、中々の大政治家として、内心、天下を取ろうとする野心は勿論これをもっていたが、そこは老巧な彼の事ですから、秀吉の薨後も、しばらくの間はなお隠忍して、これをおもてにあらわさなかった。彼は秀吉の遺言通りに、伏見にいて政務を見ていた。しかし、慶長4年正月、前田利家が淀君と共に秀頼をつれて大阪城に移ったころから、そろそろその本性をあらわして、わがままな振舞いを始めた。



前田利家

例えば私婚、すなわち諸将の間で勝手に結婚することは、秀吉が固くこれを禁じておいたにもかかわらず

第1話 徳川家康の勢力

いえやす
らず、家康は、わが子の妻として伊達政宗の娘を迎える約束を結び、自分の養女を福島正則の子、及び
はちすかいえまさ
蜂須賀家政の子の妻とする約束をした。そしてそれが知れると、婚約の許可は媒酌人が得たと思って
す
約束したのだが、許可を受けていないのなら中止しようと、ぬけぬけと人を食った返事をして澄ましてい
た。自分のわがママが、どのくらいまで他の大老や奉行を騒がすか、その反応を知ろうとする小手調べ
こてしら
みたいなのでしょう。

としいえ こうきよ 利家の墓去

しかし、この時にはまだ前田利家が生きていたので、これだけの詰問を家康に敢えてすることが出来
たのですが、この事があってから間もなく、慶長4年の閏3月3日に、利家が62才で大阪に薨じてか
らは、もはや家康に対抗し得るものは1人もいなくなった。同じく五大老といっても、家康にどうにか
いえやす
対抗出来たのは利家1人でした。他の3人、即ち輝元、秀家、景勝らは、その才も力も格段に劣って
てるとも ひでいえ かげかつ
いたうえに、今やその利家が亡くなってしまったのです。

ぶしょうとう みつなり おそ 武将党が三成を襲う

のみならず、利家が薨じたために、もう一つ斯ういうことが起きました。

予ねて三成を憎んでいた武将たちも、これまでは、三成が利家をおもてに立てて家康の野心を遂げさ
せないようにする共に、巧みに利家を利用して、自分のうしろだてともしていたために、三成に対して手
たく
をつけることが出来ずにいました。しかし、今はもう何の遠慮も要らなくなったところから、利家が死
えんりよ い
ぬと共に、加藤清正、黒田長政、細川忠興、池田輝政、加藤嘉明、福島正則、浅野幸長らの7将は、
かとうきよまさ くろだながまさ ほそかわただおき いけだてるまさ かとうよしあき ふくしままさのり あさのゆきなが
いよいよ日頃の怨みを晴らす時が来たと、すぐにその夜、三成を襲ってこれを殺そうとした。

三成は驚いて、宇喜多秀家の邸に逃げ込んだが、秀家及び上杉景勝、佐竹義宣らの勧めもあつたの
う き た ひでいえ
で、更に伏見に走って家康に頼った。敵ともしている家康に救いを求めたのは変なようですが、そこが
う え す ぎ かげ かつ さ た け よ し の ぶ す す
三成のずるいところで、彼は家康が必ず自分を助けることを信じていたのです。という仔細はあとでわ
しさい
かるが、果たして家康は彼を助けました。

いえやす みつなり たす 家康が三成を助ける

三成が伏見に逃げたあとを、すぐに清正らは追って来て、家康に、三成を渡して貰いたいと言った。
きゅうちやう ふところ はい りやうし
すると家康は、「窮鳥が懐に入れば獵師もこれを殺さずという事がある。況や三成は豊臣家の重
いわん
臣である。すでに諸君に敵対出来ないので大阪を去ってここに来たのに、これを諸君に渡して殺させる
のは予の愧づるところである。もし強いて渡せというなら、予は三成と共に諸君と戦う」と言った。

思いも寄らない挨拶に、7人は驚いて、それきり三成を殺すことを思いとまったが、家康は、一方で、
あいさつ
斯うして7将の要求をしりぞけると共に、三成に対しては、「貴公がこのままにしていたは、また何事が
こ
起ころうとも知れないから、一時、奉行を罷めて、佐和山城に帰られるがよい。それが幼君への忠義と
や
いうものである」と言って、三成を近江に退去させた。閏3月7日の事です。

第1話 徳川家康の勢力

三成の狡猾と家康の老獪

この時、家康の部下の中には、「7 将の訴えのあるこそ幸い、害心をいだいている三成を殺しては如何
です？」と言ったものもあったが、家康は別に考えるところがあって、三成を助けたのです。謀臣の本多
正信が家康に三成をどうするつもりかと聞いたら、家康は、「さればさ、今、どうしようかと思案している
ところだ」と答えたので、「それならば安心しました」と言って引き下がったという話も伝えられている。

つまり、家康は、一方で、ふだん自分に対して反抗しがちな、気に食わない三成をさえ、頼れば助け
るほどの律儀な家康であるので、況してや太閤秀吉が、これほど1つ気にかかるという、懇々と頼んで
行った秀頼を粗略にする筈がないと、世間に思わせておいて、(これはまた三成が初めから予期して虎穴に
身を投じたところでもあったのですが、) その実は、謀反気に富んだ三成を生かしておけば、今に必ず変乱
を惹き起して、自分に乗じる機会を与えるに相違ないと、むしろ三成を道具に使うために、その生存を必
要としたので助けたのです。

実際、知恵というものには、上には上のあるもので、三成は謀ったつもりで謀られたのです。三成
も中々狡猾ですが、家康は更に其の上に出て、老獪だったのです。

(第1話 徳川家康の勢力 終わり。 次は前頁に戻り、 第2話 関が原の戦い へ)